

柯慶明さんの思い出

川合康三

日本京都大學名譽教授

初めて識ったのは、一九八八年の秋、わたしがハーヴァード燕京にvisiting scholarとして滞在していた時だった。彼も夫人の張淑香さん、子息の小馬とともにBostonに来ていた。実は柯さんよりも先に、当時小学生だった小馬のほうを識った。旧知のアメリカ人のお宅を訪れていた時、彼の子供の友達だった小馬が遊びに来ていたのである。臺灣学者の子供さんだと紹介された。

そのあとで柯さんと会った時、いきなり、中国の古典文学を語り合う集まりを持つと提案された。韓国の鄭在書さんも誘って三人、毎週月曜日のお昼に食事をともにしながら、各自の研究テーマについておしゃべりをするようになった。実際には柯さんが座の中心となつて大いに語ったのだが、古代から現代に至るまでの中国文学のみならず、西欧の文学、文化にも及ぶ博識ぶりに圧倒された。一年の滞在のなかで、それはわたしが最も刺激を与えられた時間だった。

その後、わたしはたびたび臺灣の学会に参加したが、訪臺のたびに彼と会わないことはなかった。彼のほうも京都大学招聘教授として、京都に一年滞在したことがあった。

二〇一二年春に京都大学を退いたわたしは、その夏から臺灣大学の客員教授として勤めることになった。招いてくださったのは、柯さんである。下手な中国語で一年間授業をするというのは、わたしにとっては大変な負担であったが、それを支えてくれたのは、一緒に講席に連なってくれた柯さんと日文科の朱秋而さんである。朱さんはわたしの中国語がつかえるたびに横から助けてくれ、一回も休むことなく出席してくれた。柯さんは一回だけ欠席したが、それは彼が胃潰瘍で入院したためだ。なんとか一年の業をまっとうできたのは、お二人の助けがあったからこそであり、感謝の思いは深くわたしの心に刻まれている。

柯さんとわたしとは文学に対する基本的な態度が近いのだが、しかし授業のなかで、彼はしばしば故意にわたしに反対する意見を提起した。それに対してわたしが「我不同意」と応えると、受講していた学生たちは論争が始まるのではないかと喜ぶのがわかった。彼はそうして授業を盛り立ててくれたのである。そのおかげで授業は一方的な講義に陥ることなく、議論の湧き立つ生き生きとした場となった。

授業のあとでは毎回一緒に、臺灣文学研究所の地下の食堂で昼食をとった。毎週交互に支払うことにしていたのだが、先週はどちらが払ったか忘れてしまうことがある。すると食堂のおばさんが「この前はあんたが払ったよ」と教えてくれたのも、愉快な思い出である。

*

わたしは時々、こんなことを思った——もし世界中の人たちがのこらず自分に対立し、自分を否定した時、どんな事情があろうと最後まで自分の側に立ってくれる人は誰だろうか、と。そう考えると、真つ先に思い浮かぶのが柯さんだった。彼は周囲の状況がどうであらうと、わたしを支持してくれる、わたしの唯一の味方になってくれる、そう信じていた。そんな信頼関係で結ばれていた友人を失ったことは、わたしの人生の一部を奪われたような喪失感を覚える。

人と人との関係というものは、たとえば家族であれ師友であれ、時には気まずい関係になることがあるものだ。しかし三十年を越える彼との交遊を思い起こしてみても、そういう不愉快な思いをしたことは一度もない。これは稀有のことではなからうか。それには彼が人を包み込む大きな度量をもっていたからこそだろう。

*

今年の四月一日の夕方、東京の電車のなかで趙偵宇さんから電話を受けた。趙さんという非凡な人物を識ったのも、臺灣滞在がもたらしてくれた恩恵の一つである。ひとたび電話を切ったあと、ホームに降りて掛け直した電話から伝えられたのは、思いがけない悲報だ

った。あまりにも突然のことで、周囲の現実感が消え、駅の雑踏のなかに茫然と立ちつくすほかなかった。

柯さんからたびたび聞いたことがある——ご母堂が若い日に東京に留学していた時、寄宿先の日本人夫妻から実のむすめのようにかわいがられたと。柯さんは誰に対しても温容をもつて接したのだろうけれど、わたしが受けた恩顧はもしかしたら、ご母堂が日本人から受けた恩に報いようとする思いもあつたかもしれない。そうであるとしたら、人に対する温かな思いは国を超え時代を超えて続いてきたことになる。柯さんから受けた温情を、わたしも次の世代の人たちに伝えていかねばならない。

【中譯版】

那些關於柯慶明教授的回憶

趙偵宇 譯

京都大學文學研究科博士課程

一九八八年秋天，我在哈佛燕京學院擔任訪問學者時，認識了柯慶明教授。那時，他與夫人張淑香教授、兒子小馬一同來到了波士頓。不過其實，在認識柯老師之前，我已經先見過了當時還是小學生的小馬。有一回我去拜訪美國友人的家，友人兒子的朋友小馬，也剛好來到他家玩。友人便跟我介紹：「那是臺灣學者的兒子」。

後來，跟柯老師見面的時候他突然提案，說我們來辦個中國古典文學的討論會吧。於是，又再邀上韓國的鄭在書教授，一行三人，便於每週一的中午，一邊吃飯，一邊分享自己的研究主題。不過實際上我們的討論都是以柯老師為中心展開，他每每旁徵博引，話題從古代跨越到現代的中國文學，甚至涉及到西歐的文學與文化。如此博學的他，實在讓我們佩服不已。對我來說，在那一年的訪學當中，那些討論，正是最有收穫的時光。

在那之後，我時常會去臺灣參加研討會，每次訪臺，無不跟他見面。而他也曾經以京都大學招聘教授的身分，在京都待過一年。

二〇一二年春天，我自京都大學退休，同年夏天，成為了臺灣大學的客座教授。負責招聘我的，也正是柯老師。對我來說，要我用不甚流利的中文進行授課，實在是一件沈重的負擔。幸好授課時，還有柯老師跟日文系的朱秋而老師同席，實在給了我很大的幫助。我在用中文上課的時候，朱總是在一旁輔助說明，一堂都沒有缺席。柯雖然缺席了一次，但那次是因為他因胃潰瘍而住進了醫院。我那時能夠勉力上完一學年的課，都是靠這二位的幫忙，感激之情，一直銘記在心。

柯老師與我在文學上的立場相近，但他經常在課堂上刻意提出跟我相反的意見。對此，我也會回答「我不同意」，並欣喜地期待能夠藉此引起修課學生們的討論。他總是像這樣幫忙炒熱課堂氣氛。多虧了他，那堂課才不致於變成單方面的講授，而成為了眾人能夠一同熱烈議論的所在。

在每週課堂結束之後，我都會與他去臺灣文學研究所地下室的食堂吃飯。雖然我們總是輪流請客，但時常會忘記上週究竟是誰付的錢；見此，食堂的歐巴桑就會說：「上次是你付的啦」，也是一段令人感到愉快的回憶。

*

我經常會這麼想——若是有一天，這世上所有人都與我對立、否定我的存在，那麼究竟有誰會不離不棄地站在我這邊呢？每當想起這個問題，最先浮現的答案總是柯老師。我深信，

他無論在什麼樣的情況之下，都會支持我，願意當我唯一的伙伴。我所失去的便是這麼一位與我有著如此深厚羈絆的友人，他的離開，就好像我人生的一部分被無情奪走一般。

人與人之間，無論是家人或是師友，有時候仍難免會有所齟齬。然而回想起我與他這三十年來的交遊，我們之間卻沒有過任何一次不愉快的回憶。這難道不是非常罕見的嗎？若是沒有他那容人的大度則不能如此。

*

今年四月一號的傍晚，在東京搭著電車的我接到了來自趙偵宇同學的電話。會認識趙同學這麼一位特別傑出的年輕人，也是那次旅居臺灣的機緣所帶來的恩惠之一。我掛斷電話之後走出電車，在月臺上又回撥了給他。話筒另一端傳來的是令人措手不及的悲痛消息。由於那消息來得太過突然，周圍的一切彷彿都失去了現實感，車站熙來攘往，我只能悵然若失地佇立在人群之間。

我以前常聽柯老師說他的母親在年輕的時候留學東京，那時寄宿在一對日本夫妻的家中，他們疼她，如疼自己女兒般的往事。柯老師無論對誰總是親切以待，我也多受其恩惠，或許他是想將母親當年所受的恩情回報給日本人也說不定。若是如此，那麼這段善緣就跨越了國境，也跨越了時代。因此我想，將從柯老師手上獲得的恩情繼續傳給下一代，便是我今後不得不為的使命。



與柯老師合影。左起：朱秋而、張淑香、川合康三、柯老師。



與柯老師合影。左起：柯老師、江寶釵、張淑香、川合康三、朱秋而、陳明姿。